

準備委員会企画シンポジウム

教育心理学の応用可能性を考える

—社会・臨床心理学の基礎研究を題材として—

【企画趣旨】

学問の細分化が進み、それぞれの学問領域が目覚ましい発展を遂げた現代では、「隣の学問領域」のことを理解するのも一苦労だという場合が多い。教育心理学もその例外ではなく、「心理学の他領域」との間に具体的な接点を見出せる機会は狭まってきているように思われる。一方で、現実社会の問題は複雑性が高く、単一の学問領域の手法だけでは扱いきれない場合がほとんどである。研究知見を真に世の中に役立てていくためには、学際的な発想を磨き、複雑な問題に対して多角的にアプローチする力を蓄えることが必要だろう。教育心理学と「隣の学問領域」にどのような接点があり、また教育心理学の理論や観点を「隣の学問領域」の文脈でどのように活用できるのか。本シンポジウムでは、教育心理学の応用可能性について、専門性の垣根を越えて議論する。

教育心理学の応用可能性を議論するための題材として、本シンポジウムでは、社会心理学（正木）と臨床心理学（樫原）を専門とする若手研究者が自身の研究成果を紹介する。両者は、「職場におけるダイバーシティ・マネジメントの構築」（正木）、「うつ病罹患者に対するスティグマ（偏見）の低減」（樫原）といった「現実社会への介入」を目標に掲げ、質問紙調査や心理実験といった基礎研究から一歩踏み出そうとする段階にあり、各々の文脈で「人が教え合い、学び合う」という教育心理学の発想を採り入れる必要性を感じている。当日は、そうした両者が考える「教育心理学の応用可能性」をまず提示する。

その上で、教育心理学を専門とする指定討論者（子安）がコメントし、各研究の発展に向けて教育心理学の理論や観点をさらに活用する余地がないか討論する。さらに、公認心理師が誕生し、産業・労働分野に心理職が参入することへの社会的要請が高まっていることを踏まえ、「ダイバーシティ・マネジメント」「うつ病予防教育」というトピックについて理解を深めることの意義を俯瞰的に解説する。これらの話題提供と指定討論をもとに、フロアの先生方も含めて、教育心理学の応用可能性について活発に議論していきたい。